

2017年1月22日(日)

説教:「わたしの服に触れたのはだれか」

聖書:マルコによる福音書5章21～43節

ここは癒し物語。一つの物語に二つの癒しが交差するようにある。一刻を争うような状況の中に、もう一つの癒し。この物語は何を伝えようとしているのか、何故、二つの癒しが重なり、交差するように記されているのか。

会堂長ヤイロは重病の娘の癒しを願い、イエスにお会いする。会堂長は律法を重んじ、安息日の礼拝を仕切る人。その人がイエスの足もとにひれ伏す(22 節)ことは、“イエスこそ、主なる神”と告白している事になる。イエスへの告白へと押し出したのは、娘を助けて欲しいという藁(わら)をもすがる思いが、会堂長である父親を告白へと導いた。時に私たちが、身に起きる不幸が、苦しみが、神に向かわせるということはある。

もう一人の女性もそう。イエスの一行がヤイロの娘のところへ急いで向かう途中、一人の女性が現れる。「十二年間も出血の止まらない」(25 節)という病におかされ、どんなに苦しい状況に立たされていることか。ここで聖書的に見逃してはいけないことは、当時の律法では、“血”は汚れた物、触れてはいけない物とされ、不浄な女と避けられてきた。家から出てはいけない、隔離されていなければならない。この女性は、そういう立場に置かれていた人である。そういう社会的制裁の下に生きなければならなかった苦しみは、病そのもの以上とも言えよう。この女性もまた、自分自身の身に降りかかった不幸のゆえにイエスへと向う。

私たちは、この物語から何を聞こうとしているのか？ 死んだ者をも生きかえらせる奇跡物語として終わるのか？ ここは、この世で神の子として、神の御業を成す時、人の子が、一人ひとりに向き合う時、当然ながら時間差が伴い、同時に二人の人に向き合うことは出来ない。私たちならばこういう時にはどうするか？ 自ずと優先順位を決めてこなすしかないであろう。この物語に照らし合わせるならば、最初に依頼のあった重病の子に急いで向かうだろう。その時、長血を患う女性が、服に触れたことなどまったく気づくはずはない。これが、私たちの限界である。しかしイエスは、「わたしの服に触れたのはだれか」と立ち止まり、その人に向き合おうとされる。これは神の業そのものである。私たちに出来ることではない。神は、私たちの小さな声に、“神さま”と呼ぶ声に、神は立ち止まり「だれか？」と振り向き、辺りを見回し探すお方なのである。

もう一つ。私たちはしばしば、忙しさにかまけて、留まるべきところを素通りすることはないだろうか？ キリストはそこに留まって居られるのに、キリストを置いて素通りしていないだろうか？ 私たちは本当に大切なものを見失うことはあるもの。私たちは常にキリストの視点はどこにあるのかを、いつも考え、深めながら、歩む者でありたい。(神谷)